

< 研究ノート >

文化財保存によるまちづくり —市立枚方宿鍵屋資料館を事例として—

佐野 ちひろ

はじめに

文化は都市計画を包含する幅広いものと考えられ、地域産業との結合ものぞまれ、これらの試行錯誤のなかから個々の文化施策のあり方の方向、時期がおのずと決まってくるという¹。従来、文化の発達は、道路をはじめとする社会基盤整備を促進させたその過程において、文化の発達と、道路の機能・形態との間に一定の因果関係が成立すると考えられてはいるものの、従来、地域間交流の社会基盤整備（道路や鉄道など）について、経済的な視点からは検証が行なわれてきたが、生活や文化の視点から地域間交流に関する史実とその現状に関する調査があまり行なわれてきていないという指摘がある²。

大沢泰一氏によれば、地域の固有の財を活かすということは行政の課題であるだけでなく、住民運動の目標であるとされる³。また、広く生活者一般の内発的な欲求としても高まってきているという⁴。本稿ではこうした認識をもとに、枚方市を題材に『鍵屋資料館』を分析する。

枚方市の「文化によるまちづくり」のなかで歴史的建造物といわれる建物がどのように形成され、現代に機能、活用されているのか。本稿では、大阪府枚方市にある市立枚方宿鍵屋資料館を事例としてとりあげ、400年間存続した料亭「鍵屋」が、市立枚方宿鍵屋資料館（以下鍵屋資料館と記す）として変化したことと焦点をあて、枚方市の「文化によるまちづくり」、そのなかでも文化財保存によるまちづくりに着目する。料亭「鍵屋」は、淀川水系を利用した商いと宿場まちを形成した歴史的背景をもち、江戸・明治・大正・昭和の各時代に維持し、経営し続けてきた経緯がある。枚方市の取り組みとして、文化観光資源を整備し、まち

づくりに生かすことが挙げられており⁵、平成になり、枚方市は料亭「鍵屋」とその歴史を「食らわんか船」と組合せながら、建物の造りは改築しつつも原形を保たせ、展示資料館として開放した。博物館や資料館は、歴史や文化を地域自らのアイデンティティとして確認し、それを未来に引継ぐための装置としての存在も大きく⁶、とりわけ歴史的建造物を活かしたまちづくりは、景観とまちづくりのなかに位置づけられている。

「鍵屋」のように連綿と受け継がれた文化、ここでは伝統と一般的にいわれているものの一つが、今日にいたるまで、どのように変化してゆくのか。そして、歴史的建造物というのは、かつての都市構造を示唆している点でも貴重という指摘から⁷、「文化によるまちづくり」において、歴史的建造物を残し、保存し活用していく意義がどこにあるのかを検討する。

1.都市と文化—都市政策論からの分析—

従来、日本では、道路の整備や上下水道、工場の誘致、産業構造をどのように導き、人口をいかに増やすかで文化に対する考慮が欠落されたままの時期がある。文化の経済的分析をすれば、博物館が道路に匹敵するほどの経済効果があるという。つまり、文化を経済領域で表すと、博物館や劇場などの多くの人が集まる場所、施設を指す。京都市の場合をみると、歴史的遺跡の多いことから、文化財の保存が重視されるし、都市にはそれぞれのタイプがあり、文化は私事、趣味ではなく、公共のことという認識が日本社会に出てきて、「文化のハードウェアの開発は役所の仕事、ソフトは民衆が開発」という文化を担うそれぞれの役割分担が表れてきた⁸。

経済学の領域で文化が見直されている代表的なものに、後藤和子氏が挙げられる。氏は、芸術・文化の公共政策の本質と課題を解明し、分権化の流れによる都市の公共サービスとしての文化支出、文化の対象を芸術に限定して捉えている⁹。氏の論拠となるところは、欧米における芸術・文化の公的支援、主にアームズ・レングスの原則であり、それらが対象としているものを文化とみなしているところにある。また、近世における農村舞台の研究から、農村舞台における創造を支えたのは文化交流のネットワークとコミュニティにおける住民の自治であったことを示し、地域ごとに固有性を生かした創造が行われ、交流を通して発展するようなシステムをつくる必要があると提示した。さらに、文化の定義を、創造性を中心に考え、文化の機能の核心ともいべき創造性に対する関心は経済学のなかでどのように扱われているかを論点とした『文化と都市の公共政策—創造的産業と新しい都市政策の構想—』では¹⁰、文化産業や創造的産業の空間的展開としての都市政策や都市・地域の再生に焦点をあて、NPOによる公的セクター、私的セクターの支援が必要であることを示した。文化や文化資源のもつ潜在的可能性に着目し、創造性や文化政策の視点から他の政策分野を見直すことを通して、都市や地域の再生を展望した。

しかし、都市の文化は必ずしも都市の芸術家が創造するのではなく、都市に生活するひとりひとりが都市文化の創造者ともいえる。それぞれの都市には歴史があり、その歴史性を場所という範疇で表現し、都市とは何であるかを考察することをテーマとした論考もある¹¹。後藤氏の文化の捉え方は、1990年代、創造(的)都市という概念の提唱に伴い、狭義の芸術や文化財から広義の概念へ変化しているという評価もある¹²。

佐々木雅幸氏の論考は、イタリアのボローニャと並ぶ「日本の創造都市」として金沢市を事例としてあげている¹³。金沢市は、文化ホールなどのハード事業より芸術創造のソフト事業の優先により、紡績工場の煉瓦造り倉庫を市民が芸術活動に使用する参加型文化施設「市民芸術村」に再生した。そこで市は、伝統環境の調和を重視したことにより、内発的發展と呼ばれる独自の発展方式が生まれ、都市経済の発展をはかる新しい産業発展の方式を「文化的集積を生かした都市の文化的生産」と呼ぶなど、金沢市にある加賀の歴史・生活文化と伝統工芸などの産業をあわせて 21 世紀に向け

た金沢の創造都市戦略が形成されつつあると結論づけた。

以上の諸説から、都市政策の 30 年間を振り返ってみると、都市政策と文化開発とを区別し、大阪、東京などの大都市を対象としている。都市における文化とは、舞台などの実演芸術、美術館などの文化施設及びその展示物である芸術作品ということに集中している。経済効果を出すためには、人が集まって活動しなければならず、その手段に文化が用いられている。つまり、文化は、人が集積する空間・場であり、人びとの創造性を伸ばすための手段になるものという概念づけができる。本稿では、鍵屋という歴史的建造物を今日その土地でいかに活用しているかを考察したいので、佐々木氏の論のように、創造性を伸ばして 21 世紀の都市へ発展させる要因として文化を捉えるなら、市立枚方宿鍵屋資料館を具体的事例として挙げて、「文化財を活かしたまちづくり」の現状が明らかになってくるのではないだろうか。

ここ数年、潜在的な文化を掘り起こし、その活用のためのプログラムを構築するための方法論が主眼となっているが、この方法論は首都のみを対象にするのではなく、地方も対象とし、地域ならではの枠組みを構築することで、新たな価値創造に向けての施策を展開することが求められており、多くの歴史的資源のうちに、新しいデザインのありようを試みる¹⁴。本稿で取り上げる「鍵屋」を含め、歴史遺産が文化資源であり、経済的な意味でも大きな資源であると仮定するなら、受け継いだ過去の遺産を現代生活のなかで活かしていくことが目的となるだろう。

2. 歴史の視点からみたまちづくりについて

近代以降の歴史的建造物の保護制度は、国中心の制度であったけれども、現在の歴史的建造物の保護制度では、個人所有の民家や近代の土木建造物までを対象範囲とし、文化財の持つ価値を享受する権利を市民が有するようになった¹⁵。このことは、「少数優品主義」の文化財保護から文化財を日常的に活用しながら保存してゆく方向に市民の意識が変化し始めたことを意味する¹⁶。

これにともない、全国ほとんどの自治体で景観整備が重要施策として意識されるようになり、コモンセンスをもとにした基本計画づくりを推進させるようになり、日常で人びとが目にしていく景観を、見直すための手がりとして、歴史が重要な役割を果たすことになった¹⁷。

歴史的建造物の保存の制度に、伝統的建造物群保存地区（伝建群）がある。伝統的建造物群保存地区は、市町村が都市計画法に基づいて指定し、その後、文化財保護法にもとづいて文化財保護審議会が重要伝統的建造物群保存地区（重伝建）に選定するというものである¹⁸。建造物のもう一つの制度に、「登録文化財」がある。登録文化財は、外観のみを保全し、内部は自由に改装してよいという、現代の生活と景観保全を両立させようという考え方がある¹⁹。

本稿で取り扱ったまちづくりの事例は、大阪府枚方市の文化財を活用したまちづくりである。近畿をみるだけでも、府県の県民性の違いもあり、その保存・活用に大きな差が見られ、大阪は、太平洋戦争中に空襲によって中心部が焦土と化したこともあり、復興を中心としたまちを形成してきたので、京都のように歴史を顧みてのまちづくりではなく、「戦後の経済システムにのったまちづくり」をしてきたという²⁰。しかし、大阪府全体のまちづくりがすべてそうであったとはいきれないが、枚方市の事例は後に述べることで、ここでは京都が歴史を顧みているということから、京都のまちづくりについて少し紹介する。京都のいくつかの特徴をあげると、

- ・ 天皇の住む内裏があった
- ・ 8－19世紀まで都
- ・ 町家の共同体がある
- ・ 小学校制度・電気事業などの先進都市
- ・ 日本一の観光都市
- ・ 景観保全を課題としている

という、以上 6 点があげられるだろう。京都市によれば、他都市に先駆けた取り組みの展開として、

- ・ 日本初の公立画学校（京都市立芸術大学の前身）の創立などによる文化芸術の振興
- ・ 文化観光資源保護財団などによる伝統文化、文化財の保存・振興
- ・ 技術・技法の継承や後継者育成など日本の文化を支える伝統産業の振興

などがあげられる。この取り組みを行なう理由には、グローバル化の影響にともない、京町家の減少など、京都独自の景観や文化の喪失の危機が背景にある。そこで、国家戦略として京都の歴史的・文化的な価値を守り活かす気運が高まり、「歴史都市・京都創生策（案）」が提案された。平成 18 年からは、今後の取り組みや国への提案・要望などを具体化した「歴史都市・京都創生策Ⅱ」を策定し、「永遠の歴史に育まれてきた文化の継承と創

造」を展開することを決定した。そして、現在、京都市市政のまちづくりの取り組みを見てみると、京都市では、「歴史都市・京都」と銘打って京都ならではの魅力を引き出すために「景観」、「文化」、「観光」の 3 つの分野を軸とした「京都創生」の取り組みを進めている²¹。京都の人々の生活も、長い歴史からの蓄積により生み出されてきた。しかし、長い歴史からの蓄積といえどどの地域にも当てはまる。それでは、京都のまちの形成により、どういうものを京都はつくり出してきたのか。なお、ここでの京都は、中世・近世における洛中洛外を範囲とする。前近代の京都のまちづくりは、「住みこなし型まちづくり」（平安時代～室町時代）と「計画型まちづくり」（戦国期以降）に分けられる²²。住民の地縁的共同体である町が発展し、それにともない自治的活動も発展することにより、上京・下京の惣町組織が成立し、洛中洛外図屏風からも商工業発展の様子が窺える。近代のまちづくりは、前近代までの多面的な支配から国家の名のもとに一つのシステムに統合されていく過程を意味しているが、京都では、歴史的に基盤を築いてきた民衆である町組の影響力や、「歴史都市」としての演出が独自のまちづくりを導くことになったとの指摘がある²³。現代は、少子高齢社会のなか、市民活動が活発になり、特定非営利活動促進法（NPO 法）が制定されるなど、京町家を取り上げた市民活動団体が活発な活動を展開することで、従来の地域コミュニティに加え、新しいコミュニティが生まれてきている²⁴。京都については、古都の歴史を重視し評価しつつ、開発のために、条坊制や町の構から始まるまち並み、まちという広い土地空間、文化財を含めたまち並みという景観、町家という建物などの空間という側面から歴史的環境の形成として²⁵、まちづくりがなされてきた。

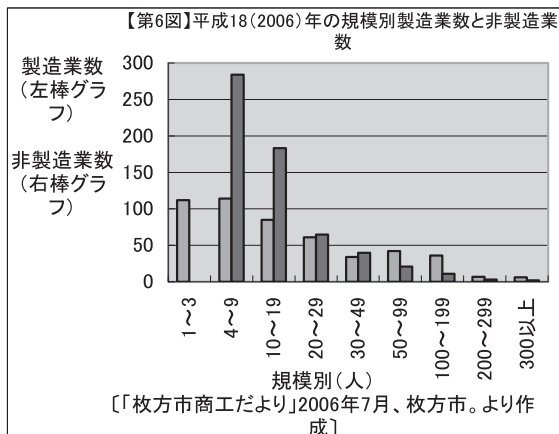
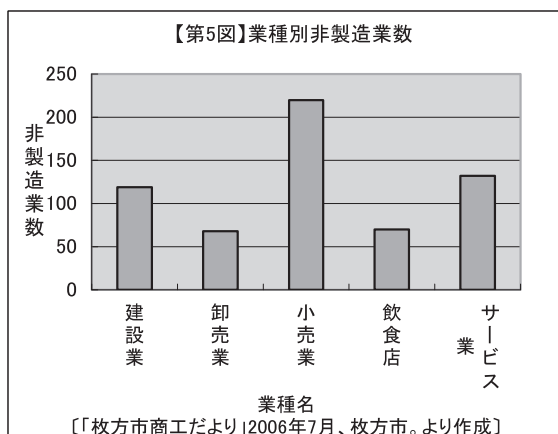
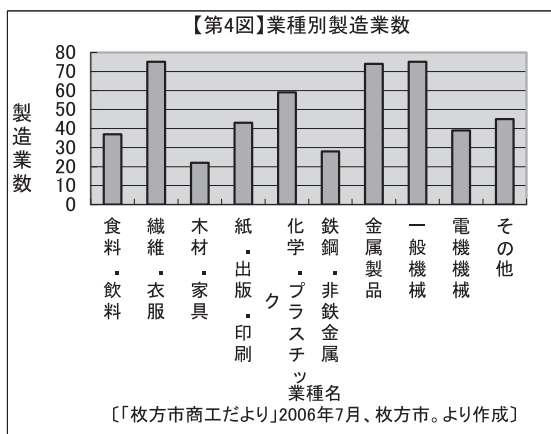
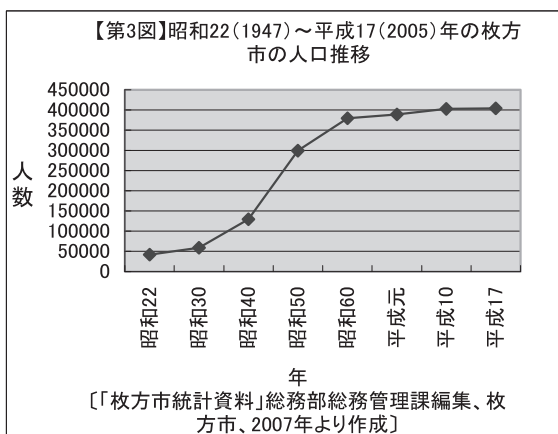
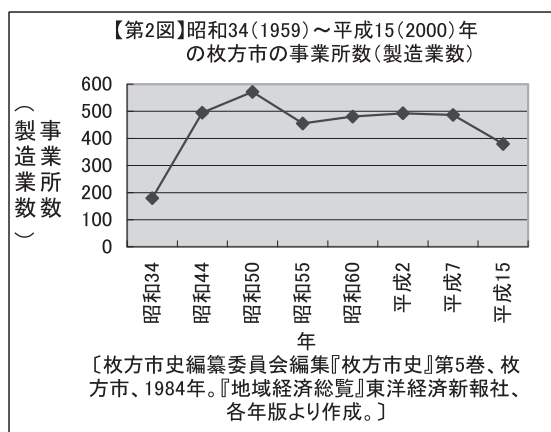
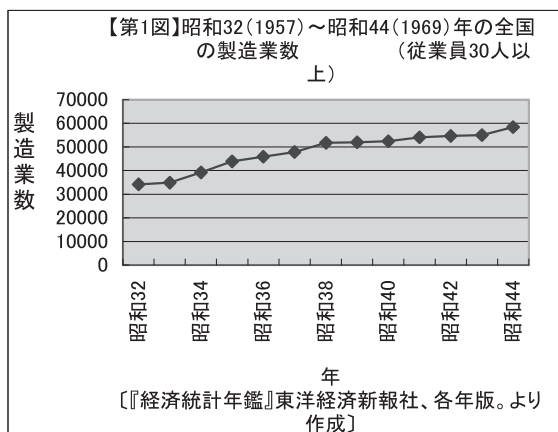
このように、文化とは歴史全般のことが主に考えられるのではないかな。長い歴史のなかで営まれてきた生活も文化として挙げるができるので、したがって、本稿では歴史と生活を文化として定義したい。それでは、枚方市ではどのようなまちづくりが展開されているのか。次節では、枚方市の文化財を活用したまちづくりについて検討する。

3. 枚方市の特徴ー産業を背景にー

枚方は綿作がさかんで、米作の 3～5 倍の収益があったという。明治 30 年代（1879～1906 年）まで、河内木綿として生産された綿花栽培が続き、

倉敷紡績株式会社・鐘淵紡績株式会社・日本紡績協会などの紡績会社が設立された。綿の長さが短い河内木綿は柔道着には最適とし重宝された。これを契機として枚方市は発展していく。しかし、エジプト綿が進出することで、河内木綿産業は衰退の一途をたどる²⁶。代わって、大正 8 (1919) 年には、日本メリヤス株式会社が設立され、大正 13 (1924) 年、倉敷紡績株式会社が同社よりこれを買収した。戦時中は陸軍に接收されて、軍需生産のための綿紡績を続け、終戦後、倉敷紡績として再建された²⁷。戦後、枚方市の経済発展は 2 つの要素から構成される。①近世交通上の要駅として発

達を遂げた宿場的性格。②枚方市への合併による農村としての性質である。①は、枚方宿として発達した宿場的な性質が働いていることを示し、②は、農家戸数が職業別世帯構成において占める比率が 5 割という、当時の枚方市の特徴としてあげられる²⁸。枚方市の工場誘致政策にともない進出工場が通増し、従来の中心産業であった農業は、昭和 20 年代後半をピークに停滞ないし遞減傾向を見せ始めた。昭和 30 年代まで続いた紡績業も、以降、松下電器や SANYO の会社や工場が淀川に沿って設立されることで、中小企業が多いまちへと移り変わってゆく²⁹。そして、枚方市は昭和 44



（1969）年までの 10 年間で宅地開発と工場の進出を反映して、製造業の比重が急速に高まり、枚方市の産業構造が転換していく段階に入った³⁰【第 1 図】【第 2 図】。

枚方市は、その後、昭和 44（1969）年から 55（1980）年までの 12 年間は、年間の転入者が 3 万人を超えるという人口増を続けた結果、昭和 64・平成元（1989）年以降、40 万人になり小人口の田園都市からベッドタウンの衛星都市へと大きく変貌した³¹【第 3 図】。

しかし、平成 9（1997）年のデータを見ると³²、工場数が減少し、枚方市の工場出荷額上位 6 位業種に、衣服・その他の繊維製品が姿を消した。枚方市の産業は、非製造業は小売業が多い【第 5 図】、非製造業よりも、製造業の方が集約数が多く、とくに金属製品、一般機械の業種が多い【第 4 図】。製造業の規模は、1～3 人、4～9 人、非製造業の規模は、5～9 人が主である³³【第 6 図】。製品販売価格によると、2006 年度は値下がり企業が減り、販売価格が持ち直す動きが見られた。設備投資額は横這いを占めているが回復基調は変わらない。しかし、一方で増減企業が増え、企業格差が拡大し、好転の動きは一部にとどまっている³⁴。日本銀行の量的緩和政策が 5 年ぶりに解除され、国内の消費回復、企業収益が増益し、企業の設備投資の増加と公共投資の縮小、若年層の厳しい雇用情勢、世界景気の回復基調など、国内、海外の景気の状態に、枚方市はどこまで組み入れ、景気回復が見込めるのか、模索のなかにある³⁵。

また第 5 図から見られるように枚方市では小売業が盛んであり、伝統産業としては、河内そうめん産業や酒造業が知られている³⁶。現在、つくり酒屋は減少しているが、近世におけるつくり酒屋は約 60 件あり、商業活動範囲として千早赤坂から河内、摂津富田・伊丹まで広がっていた。とくに俳句などの文化活動もさかんであったという³⁷。

このように枚方市の特徴は、戦後、鉄道敷設や工場誘致が進み、農業中心から工業中心への産業転換と近年のベッドタウン化による人口の増加は、近世からの淀川水系の利用と宿場町としての交通の要衝であったことが要因になっていることが、市の特徴といえる。

4. 枚方市の文化によるまちづくり－市立枚方宿鍵屋資料館－

先にも述べたように、戦後、枚方市の経済発展

は、①近世交通上の要駅として発達を遂げた（宿場的性格）と②合併によって枚方町から枚方市への編入による農村としての性質の二つの要素から構成されていたが³⁸、枚方市は、枚方宿地区のまちづくりの一環として①の宿場的性格を活かし、平成 12（2000）年に料亭「鍵屋」を取得（主屋は寄付）した。「平成 10 年第 4 回枚方市議会定例会議書案」には、「財産（鍵屋建物）の取得について」という議案第 39 号が記録されている³⁹。そこには、「居宅・倉庫（別棟）、木造瓦葺地下 1 階付 2 階建」と「倉庫（蔵）、木造瓦葺 2 階建」と取得物件として表示され、契約先は枚方市土地開発公社となっている。取得予定価格は「金利及び枚方市土地開発公社事務費を除いた」49,895,965 円であり、用途は、「仮称枚方宿鍵屋資料館建物」と明記されている。そして、その保存活用を図るため、枚方市の歴史街道モデル事業により枚方宿鍵屋資料館整備が進められ⁴⁰、平成 13（2001）年 7 月 3 日に資料館として開館された。

枚方市総合計画は、文化観光資源を、整備し、まちづくりに活かすことを挙げ、歴史テーマとして「くらわんか舟と枚方宿のまち」を設定した。これに基づくまちづくりの展開として、歴史街道モデル事業や市内歴史文化資源を活用した観光ルートの整備等による歴史を活用したまちづくりの取り組みが行なわれている。ここに、枚方市は、歴史資源などを活用し、集客機能を高めることが取り組みの方法として挙げている⁴¹。

鍵屋資料館は、町家のなかに入れるだけでなく、江戸時代の宿場の賑わいを知ることができ、三十石船の船宿として栄えた主屋は、通り庭、起り屋根など、江戸時代の町家の特徴だけでなく、客の出入りが多いために擦り上げ戸になっているなど、船宿の構造を残す貴重な歴史的建造物として、平成 9（1997）年、市の文化財に指定された⁴²。

この鍵屋資料館では、解体復元した主屋のほか、別棟 1 階を 6 つのコーナーに分けて、宿駅と舟運によって繁栄した枚方宿の歴史を音声や映像、模型などにより解説されている。こうした試みは、第 22 回大阪まちなみ賞の特別賞を受賞し、「・・・略・・・昭和初期の建築とされる別棟は、1 階は枚方宿や淀川水運の展示に、2 階大広間は各種の文化イベントに活用されている。市民ベースでの文化の継承、観光 PR の拠点となっている。・・・略・・・」と、評価されている⁴³。

以上のような評価の背景には、淀川は舟運の便をなすとともに、昭和 20 年代は、鉄道の押され気

味で盛況ではなかったとはいふものの⁴⁴、淀川汽船部が小汽船及び曳船をもって主として貨物の運送を営み、市民の生活の足が、淀川の水運であり、終戦後、水運（クリフ＝運河）が発達したことにある⁴⁵。

そのため鍵屋は三十石船の船宿であり、淀川との関係が深く、京都などの近隣と連携をはかるなど、近世以降からの淀川の水運と宿による歴史を活かしたまちづくりが展開されてきた。

では、このような鍵屋資料館を、枚方市のまちづくりの取り組みから見るとどうだろうか。鍵屋資料館自体が見学できる展示スペースをもち、後に述べるが枚方文化観光協会になっていることから、「地域志向型」と「観光志向型」に該当すると考えられる⁴⁶。「地域志向型」は、地域の課題に博物館の機能を通して市民とともに答えていこうという視点で資料を収集し運営していくことが第一の目的であり⁴⁷、そして、枚方文化観光協会になっていること、「枚方市文化財保護条例」には「市民の文化的向上に資することを目的とすること」と明記されていること⁴⁸、「市立枚方宿鍵屋資料館条例」第 1 条には、「枚方宿に関する文化財その他の資料（以下「資料」という。）を活用することにより、市民に歴史的学習の場を提供し、もって文化活動の振興に資するため、市立枚方宿鍵屋資料館（以下「資料館」という。）を設置する。」⁴⁹とあることから、市民が見学し歴史的な文化を享受できる場になっているの「観光志向型」ともいえる。

枚方市のマスタープラン（平成 12 年 2 月）をみると、「快適な都市アメニティの充実を求める市民や企業の声が多くある」⁵⁰と記されており、価値観や社会環境の変化に対応しながら、次世代に継承できる柔軟で持続的な都市基盤をつくることを理念の一つとしてあげている。枚方市は、淀川や国見山などの水や緑の自然、旧京街道などの歴史・文化が残る都市として、貴重な資産を保全・活用し、市民が愛着をもつことができる風格のあるまちづくりを行い、幅広い交流をつくりだすことを、自然や歴史文化の保全活用のなかの基本方針として打ち出した。なかでも鍵屋資料館のある地域は、京阪枚方市駅、枚方公園駅を含む南西部地域に区分され、「旧京街道枚方宿がつくられ、『人とモノが集まる拠点』としてにぎわい、枚方市の玄関口として、時代の変化に合わせて成長してきた」とし、「この旧京街道などの歴史的遺産や、段丘崖に残る斜面緑地や、淀川や天野川といった河川などもあり、都市機能だけでなく歴史・自然環境に恵まれた地域である」と評価して、「これらの歴史・

自然環境を活用し、交流機能や文化・福祉機能を付加して、世代間の交流を促進し、周辺都市を含む枚方都市圏の広域拠点にふさわしい『人が集まる広域交流拠点』の形成を図っていく」としている。

5. 鍵屋の歴史的変遷

このように鍵屋資料館が「文化によるまちづくり」の中心になったことは、枚方市における歴史的・文化的価値の表れといえる。では、料亭「鍵屋」は、今までどのように経営され継承されていたのか、歴史的変遷をここでたどってみたいと思う。

枚方は、室町以後の名であり、もとは「平方（湯）」の文字が充てられ、沼地を埋め立てたことにはじまる⁵¹。淀川堤防を交通の要路として利用したのは天正期（1573～1591 年）以後のことで、それまで京都から大阪にいたるには東高野街道または河内街道を南下して四條畷方面に出たのである⁵²。枚方市は、御料所（＝天領。現枚方市駅周辺）であると同時に五街道の要衝の一つであり、当時は、それにとりもなった船宿が 20～30 件ある。そのうちのひとつが、鍵屋である⁵³。鍵屋は、船宿から出発していたが、明治に入ってから料理屋を兼業した料亭旅館になった。同家の祖（鍵屋太兵衛＝吉川太兵衛）は、三島郡の出身である。その家の仙徳火鉢の台木に天正の年号を彫刻したものがあり、当時の文字がある旧建物の木材も発見されているという⁵⁴。これらの事実から、鍵屋が天正年間（1573～1591 年）の創立であることが推測され、400 年間存続しているとされる⁵⁵。元和元（1615）年のキリシタンの暦中にも「カギヤ」の名があり、同家にマリア観音を所蔵していたというから、その歴史の古さがしのばれる。その後、明和の頃（1764～1771 年）、この家の中興とする鍵屋善七によって、店は繁盛し、鍵屋の名は各地に知れわたるようになった。

近世において、枚方は京阪間の中央にあるため、東海道に繋がる往還としての陸上交通の要衝となり、鍵屋のある堤町だけでも 21 軒の宿屋があった。ここに遊里が設けられ、鍵屋浦の名が枚方の名とともに一般的になってゆく⁵⁶。鍵屋はその代表的なもので、俗謡にもあり、この唄から考えてみても鍵屋がいかに繁盛していたかが窺い知れる⁵⁷。また、淀川の水利を利用した水運は、枚方の人びとにとって重要な生活の基盤となっていた。運搬する物資は主に食料品が中心であり、京都の伏見、高

瀬川まで遡って運ばれるようになる⁵⁸。これが枚方名物「くらわんか船」の起源である⁵⁹。

明治維新前後になると、当主呑海師は、「呑海節」と名付けた詠歌を編み出し、これをもって鍵屋の宣伝につとめた⁶⁰。明治になると、一時は淀川を航行する蒸気船が、鍵屋で横付けになり、伏見・大阪行きの乗船場になる⁶¹。明治 18（1885）年における淀川洪水以降、枚方の人口は減少するが、淀川改修だけでなく国道の敷設、その後の京阪電気鉄道敷設も行われ、枚方市の人口が増加すると同時に、水上交通上から陸上交通要地として重要性を帯びてきた⁶²。こうして、枚方市は、明治 22（1889）年、町村制の施行に際し、枚方、三矢、泥町、伊加賀、岡、岡新町の 6 ヲ村が合併して枚方町となり、旧村はその大字となり、淀川に沿い、京阪国道、京阪電車の南北を貫く交通の要衝として、地方の中心都市をなした⁶³。

その後「鍵屋」は経営者が代わる⁶⁴。昭和 6 年（1931 年）、鍵屋は没落したが、枚方で事業の成功を治めていた高島家が鍵屋を買い取り、鍵屋の復興、存続に努めたのである⁶⁵。鍵屋は宣伝効果を重んじ、高山右近と結び付けたマリア観音をピーアールするなど積極的な宣伝活動を行なう⁶⁶。昭和 18（1943）年に一時廃業し、終戦後復活したが⁶⁷、マリア観音や三十石舟のピーアールは効果が薄く、鍵屋は衰退の一途をたどることになった。しかし、昭和 21（1946）年頃、鍵屋の経営は回復し、昭和 26（1951）年頃、京阪電鉄も鍵屋に注目したことで、客足が伸びて繁盛した。この時期、鍵屋を大きく改築したが、それがその後の経営に響くことになった⁶⁸。また、「食らわんか船」に代表される「ごんぼ汁」など、伝統的な料理は、時代のニーズに合わなくなり、客足が伸び悩むことになった。

そして平成になってから、枚方市は鍵屋を市の重要文化財として歴史的価値の高いことを認め、まちづくりの一環として鍵屋を取得した。現在、鍵屋は資料館として運営され、枚方市の観光やまちづくりに重要な役割を果たしている。

6.市立枚方宿鍵屋資料館と枚方文化観光協会の関係

現在の枚方市は、戦後の工業化により人口が増加し、典型的な衛星都市となっている。しかし、これまでの分析から明らかなように、枚方市には淀川と宿場町の交通が古くからあり、集客の高い地域であったことから、鍵屋のような枚方市の歴

史を理解できるような文化財が存在している。枚方市では、こうした側面に着目し、文化財の発見や保護がまちづくりに重要な役割を果たすとしている。言い換えれば、枚方市が抱える課題であるコミュニティ再生や経済の活性化を、「文化によるまちづくり」で果たそうとしているのである。これが、枚方市の総合計画の論点ともなっており、そのなかに鍵屋も位置づけられている。

先にも述べたように、鍵屋は、天正年間の創業と伝えられ、伏見と大坂を結ぶ三十石船の船宿として江戸時代に栄え、近年まで料亭を営んでいた。平成 9 年に市の文化財に指定された鍵屋主屋は、極めて少なくなった江戸時代の様式を残す歴史的建造物で、寄贈を受けた市が修復を行い、平成 13 年 7 月 3 日に「市立枚方宿鍵屋資料館」としてオープンした。現在、鍵屋資料館は、枚方文化観光協会が資料館を管理運営している。「市立枚方宿鍵屋資料館条例の一部を改正する条例」第 4 条には、「資料館の管理は、法人その他の団体であって、地方自治法（昭和 22 年法律第 67 号）第 244 条の 2 第 3 項の規定に基づき委員会が指定するもの（以下「指定管理者」という。）に行なわせるものとする。」⁶⁹と記されている。

この鍵屋資料館の別棟 2 階の大広間は、枚方文化観光協会が、各種イベント会場として活用している。「くらわんか舟」で販売されていた「ごんぼ汁」の再現を中心としたもてなし事業（昼食・茶

第 1 表 市立枚方宿鍵屋資料館 年度別入館者数

		総入館者数	総入館者数合計
平成 13 年度		21,415	21,415
平成 14 年度	大人	13,771	15,817
	小中学生	2,046	
平成 15 年度	大人	11,115	13,315
	小中学生	2,160	
平成 16 年度	大人	9,789	12,035
	小中学生	2,246	
平成 17 年度	大人	12,349	14,363
	小中学生	2,014	
平成 18 年度	大人	10,814	12,931
	小中学生	2,117	
平成 19 年度	大人	9,979	11,731
	小中学生	1,752	
累計			101,607

〔出所、市立枚方宿鍵屋資料館提供料〕

菓子利用)や、伝統文化の公演(落語、箏と尺八、地歌、文楽など)等、多種にわたっておこない、入館者増につなげている⁷⁰。第 1 表のとおり、鍵屋資料館の入館者数は、年平均 14,511 人であり、オープンの年の入館者数を除いても、年平均 13,360 人であり 10,000 人はかたい。同市にある枚方市立旧田中家鋳物民俗資料館⁷¹(以下、鋳物民俗資料館と記す)の年間入館者数と比較すると【第 2 表】、鋳物民俗資料館は年平均 9,770 人で、鍵屋資料館がもてなし事業をおこなうなど、資料館展示以外の催し物を行なうことで、入館者増につなげていることが分かり、集客機能の高さをみることができる。

枚方文化観光協会の主な業務は⁷²、①市内観光案内(観光ボランティアガイドの派遣)、②情報誌「ひらり」の発行、ホームページなどによる市内文化観光情報の発信、③市内名所金属しおり、くらわんか番茶茶碗、枚方銘菓など、各種観光グッズの製作・販売、④観光名所カラー名刺の印刷、⑤各種文化観光振興事業、⑥会員の交流、研修事業、⑦市立枚方宿鍵屋資料館の運営管理となっている。このほかに、協会主催でイベント等がおこなわれるなど、枚方の文化に因んだ催し物が企画されて

いる。観光ボランティアガイドは、鍵屋資料館オープンに合わせて研修され、枚方市内を案内し、歴史の再発見や地域住民、他府県の人たちとの交流に手をさしのべている⁷³。販売では、枚方の地酒(製造は枚方市内に 1 軒)「淀菊」をもてなし事業時に提供販売し、伝統産業「河内そうめん」や枚方の名産品(枚方観光協会会員商店)「くらわんか餅」などのピーアール、販売の支援をおこなっている⁷⁴。枚方文化観光協会は、枚方市・北大阪商工会議所・各種業種団体など 15 者により協会設立が发起され、68 の事業所・商店・団体などの参加のもとで設立、平成 14 年に特定非営利活動法人となる。枚方文化観光協会では、「地域投資の拡大や新しい事業機会の提供、雇用増大など地域経済の発展を促すとともに、住民に地域の魅力を再認識させ、郷土愛や誇りを育み、良好な地域コミュニティの形成に役立つ」という観光の持つ特性に着目し、淀川水運の要衝として、東海道の宿場町など鍵屋を含む歴史的・文化的遺産を地域観光資源として発掘し、活用している⁷⁵。

おわりに―「文化によるまちづくり」の歴史的建造物活用の意義―

これまで見たとおり、文化観光資源を整備し、まちづくりに活かすことが、枚方市総合計画にあげられている。歴史テーマとして「くらわんか舟と枚方宿のまち」を設定し、これに基づくまちづ

第 2 表 枚方市立旧田中家鋳物民俗資料館年間入館者数

	個 人		団 体		月別 合計 (人)	団体 数 (件)
	大 人 (人)	子 供 (人)	大 人 (人)	子 供 (人)		
2003 年 4 月	378	69	98	0	545	2
5 月	320	31	70	319	740	2
6 月	324	23	161	11	519	5
7 月	167	54	100	8	329	6
8 月	196	68	54	88	406	3
9 月	205	13	111	465	794	4
10 月	336	32	275	881	1524	8
11 月	227	25	129	704	1085	20
12 月	168	13	23	39	243	11
2004 年 1 月	203	25	0	6	234	3
2 月	206	28	8	185	427	1
3 月	321	51	49	227	648	25
合 計	3051	432	1078	2933	7494	70

注)1984 年 10 月からの入館者の累計 195,402 人(2004 年 3 月 31 日)

〔出所、「枚方市文化財年報 25(2003 年度分)」枚方市文化財研究調査会、2004 年。より引用〕

第 3 表 枚方文化観光協会平成 19 年度の催し物

4 月	桜の生け花展、春のバスツアー、唱歌
5 月	新内浄瑠璃
6 月	鍵屋研究発表会、河内そうめん販売、天の川七夕の集い
7 月	展示「吉田初三郎と枚方」講演「吉田初三郎の世界」、折り紙教室、鍵屋研究発表会、納涼くらわんか寄席
8 月	そうめん料理と怪談落語の夕べ、唱歌(夏の歌)、和とじ教室
9 月	鍵屋研究発表会、和布小物展示と手作り教室
10 月	舟運まつり、大茶会
11 月	続・枚方の資料を読む、地歌、鍵屋うまいもん市
12 月	ワイン講座、朗読、続・枚方の史料を読む
1 月	引き札展、お坊さんめぐり大会、新春くらわんか寄席
2 月	雛人形作り教室と昼食会(大広間・蔵での展示あり)唱歌(冬の歌)
3 月	第 4 回協会杯ゴルフ大会、ガーデニング講座、鍵屋研究発表会

〔出所、<http://www.kanko.hirakata.osaka.jp/gaiyou.htm>(2007 年時点の HP)より作成〕

くりの展開として、歴史街道モデル事業や市内歴史文化資源を活用した観光ルートの整備等による歴史を活用したまちづくりの取り組みが行なわれており、ここに、歴史資源などを活用し、集客機能を高めることが取り組みの方法として掲げられている。したがって、これを「文化によるまちづくり」とみなすことができ、鍵屋資料館は、歴史的建造物として保存されつつ、資料館として市民が参加できるように、観光協会としての機能をもつという、まちづくりのなかで重要な役割を担っているといえる。

都市再生の文脈から文化によるまちづくりを見れば、「9.11のアメリカ同時多発テロ以降、市場原理主義に基づかず『互いの多様性を認め合うグローバルライゼーション』への移行を模索するなかで、日本においても文化資源や近代産業遺産を活用して創造の場を創り出し、また近代アートを核とした新しい創造産業の育成をめざしながら、都市や地域の再生を進める創造都市戦略が具体化されつつある」という⁷⁶。なぜ、文化や創造性による都市再生に大きな関心がもたれているかという理由に「製造業を中心とした20世紀型経済から、知識情報経済という21世紀型の経済社会への移行が明瞭になり、都市や地域の経済的エンジンが大規模工場から創造性あふれる企業や個人にシフトしてきた」ことがある⁷⁷。

文化によるまちづくりは、その長い歴史と生活文化の蓄積に基づいた計画を立案したまちづくりという政策のもとに、財政問題、文化行政、制度といった国や市により成された政策を基礎とし、非営利組織（ここでは特定非営利活動法人）が地域間交流を促進させ、歴史的建造物を活用していることが見て取れた。文化と産業の関係は、文化を中心において考えるなら、その地域にある産業や経済状況を踏まえて制度や政策などの枠組みをつくることに行政の取り組みがあり、その一方で、行政から委託されることで、市民の交流とまちづくりの普及をするための非営利組織の取り組みがあると考えられる。

枚方市の「旧京街道枚方宿」境界のシンボルとして「鍵屋」がまちづくりのなかで存在し、歴史的建造物として「残った」ものを「残す」ようになり、歴史が「残る」から歴史を「残す」へと変化していくと考えられる。将来も鍵屋を人が集まる空間として活用しつづけていくということになるのではないか。したがって、文化によるまちづくりが、文化の創造性を伸ばす21世紀の都市への

発展要因として捉えたとすれば、その都市の産業と生活文化（その土地の歴史や伝統）を合わせて分析することが重要となると考えられる。そのなかでの歴史的建造物の役割は、行政などの取り組みだけではなく、文化的なものへの学習・教育といった市民の文化への享受活動が加えられ、文化を伝える装置だけでなく、将来に備えたまちづくりの拠点になるものと考えられる。

【注】

- ¹ 梅原宏司「地方自治体の『文化行政』と、その背景をなす『市民』『自治』概念の関係についての一考察—松下圭一思想を中心に—」『文化経済学』第5巻、第3号、2007年、36ページ。
- ² 大沢泰一「歴史・文化からみた地域形成」『地域開発』vol. 508、2007年、31ページ
- ³ 同上、41ページ。
- ⁴ 西村幸夫「8章 アメニティと地域デザイン」『講座新しい自治体の設計 3—持続可能なデザイン—』有斐閣 2004年、191ページ。
- ⁵ 「第4次枚方市総合計画」2001年
(<http://www.city.hirakata.osaka.jp/freepage/gyousei/kikaku/soukei/dai2kikihonkeikaku-sakutei>)
- ⁶ 山田邦和「京都・歴史遺産の活用と世界遺産」『都市問題』第96巻、第6号、2005年、23-24ページ。
- ⁷ 西村幸夫、前掲書、195ページ。
- ⁸ 梅棹忠夫『梅棹忠夫著作集 第21巻 都市と文化開発』中央公論社、1993年。
- ⁹ 後藤和子『芸術文化の公共政策』勁草書房、1998年。
- ¹⁰ 後藤和子『文化と都市の公共政策—創造的産業と新しい都市政策の構想—』有斐閣、2005年。
- ¹¹ 植田和弘、西村幸夫、神野直彦、間宮陽介『岩波講座 都市の再生を考える 都市とは何か』岩波書店、2005年。
- ¹² 端信行、中牧弘允、NIRA、総合研究開発機構『都市空間を創造する—越境時代の文化都市論—』日本経済評論社 2006年。
- ¹³ 佐々木雅幸『創造都市の経済学』勁草書房、1998年、佐々木雅幸『創造都市への挑戦—産業と文化の息づく街へ—』岩波書店、2003年。
- ¹⁴ 三宅理一、アンドレ・ジガノス、澤井安勇編者『文化資源とガバナンス』鹿島出版会、2004年。
- ¹⁵ 斉藤英俊「文化財登録制度導入の意義」『建築雑誌 1』Vol.112、No.1400、1997年、26ページ。
- ¹⁶ 同上、27ページ。
- ¹⁷ 西村幸夫「都市景観政策と歴史資産の保全」『建築雑誌 1』Vol.112、No.1400、1997年、28ページ。
- ¹⁸ 久隆浩「歴史的まちなみ保存の現代的意義」『都市研究』創刊号、2001年、76ページ。
- ¹⁹ 同上、76ページ。
- ²⁰ 大武健一郎「ストックとしての歴史的建造物」『建築雑誌 1』Vol.112、No.1400、1997年、32ページ。
- ²¹ 京都市総合企画局政策推進室「歴史都市・京都

の創生を」2008 年。

22 高橋康夫「2 前近代の京・まちづくり史」高橋康夫・中川理編『京・まちづくり史』昭和堂、2003 年。

23 中川理「3 まちづくり史における近代とは」高橋康夫・中川理編『京・まちづくり史』昭和堂、2003 年。

24 平家直美・大島祥子「4 現代のまちづくりから、二一世紀のまちづくりへ」高橋康夫・中川理編『京・まちづくり史』昭和堂、2003 年。

25 谷直樹「3 山鉾町」保存修景計画研究会・西川幸治代表『歴史の町なみ 京都篇』NHK ブックス、日本放送出版会、1979 年。

26 2006 年 11 月に枚方の郷土史家・元鍵屋資料館の実行委員だった中島三佳氏にインタビューした内容に基づく。

27 寺嶋宗一郎編『枚方市史』枚方市役所、1951 年、239 ページ。

28 同上、209-211 ページ。

29 注 26 に同じ。

30 寺嶋宗一郎編、前掲書、483 ページ。事業所は 180 から 495 へ増加し、従業者は 4,132 人から 22,705 人へ急増。昭和 44 年の民営事業所数 4,350 のうち 3 分の 2 に当たる 2,868 が昭和 36 年以降に開設される。

31 枚方市編『枚方市史別巻』枚方市史市編纂委員会、1995 年、670 - 671 ページ。

32 『地域経済総覧』東洋経済新報社、各年版。

33 枚方市「枚方市商工だより」枚方市、2006 年 7 月。

34 同上。

35 枚方市、前掲書。

36 注 26 に同じ。枚方市役所ホームページ (<http://www.city.hirakata.osaka.jp/>)。

37 注 26 に同じ。

38 寺嶋宗一郎編、前掲書、209 ページ。

39 枚方市「平成 10 年第 4 回枚方市議会定例会議案書」枚方市、1998 年、102 - 106 ページ。

40 脇田隆男「わが街紹介一枚方宿」『潮騒』2001 年 6 月号、No. 54

(<http://www.npo-rdi.com/siosai54/hirakatashuku.htm>)。

41 枚方市総務部総務管理課編集「枚方市統計書平成 18 年度」枚方市総務部総務管理課、2007 年。

42 同上および「第 4 次枚方市総合計画」2001 年。

43 大阪まちなみ賞

(www.pref.osaka.jp/kenshi_kikaku/keikan-ustukushii/100kei-025.html)

本稿は、2004 年時点の HP より一部引用したもの。
(2004 年時点の HP

<http://www.pref.osaka.jp/osaka-pref/kenshi/tukusii/machi/machi.htm>)

44 枚方市『枚方市史』枚方市役所、1951 年、14 ページ。

45 2008 年 9 月に市立枚方宿鍵屋資料館(特定非営利活動法人・枚方文化観光協会事務局) 万野芳雄氏にインタビューした内容に基づく。中島三佳

氏にインタビューおよび注 26。橋はほとんど掛けられることはなく、枚方には、門真・江口・高槻など淀川一帯に住む女性が舟で嫁ぐ習慣があり、戦前まで続いたという。

46 入江洋「地域博物館における行政評価に関する考察～文化資本概念の観点から」『社会情報学研究』Vol.1、2002 年、69 ページ。

47 同上、72 ページ。

48 枚方市「平成 17 年第 1 回枚方市議会定例会議案書」枚方市、2005 年 2 月・4 月、218 - 220 ページ。

49 枚方市「平成 13 年第 1 回枚方市議会定例会議案書」枚方市、2001 年、173 - 175 ページ。

50 「都市計画マスタープラン」

(<http://www.city.hirakata.osaka.jp/freepage/gyousei/tokei/work/tosimasu.htm>)

51 注 26 に同じ。

52 寺嶋宗一郎編、前掲書、5 ページ。

53 注 26 に同じ。

54 寺嶋宗一郎編、前掲書、401 ページ。

55 寺嶋宗一郎編、前掲書、401 ページ。『切支丹高槻秘密集会所記』(巖松堂蔵)は貴重な資料として記載されている。「五月小尽己卯六日赴勝龍寺木村殿如庵志門同道也十一月大尽乙亥九日夕方河州枚方鍵屋殿御入来(文禄三年)」

56 寺嶋宗一郎編、前掲書、246 ページ。

57 寺嶋宗一郎編、前掲書、401 ページ。

58 注 26 に同じ。

59 寺嶋宗一郎編、前掲書、45 ページ、710 ページ。

60 寺嶋宗一郎編、前掲書、402 ページ。

61 寺嶋宗一郎編、前掲書、401 ページ、700 - 701 ページ。

62 寺嶋宗一郎編、前掲書、247 ページ。

63 寺嶋宗一郎編、前掲書、1 ページ、26 ページ、55 ページ、59 ページ。

64 寺嶋宗一郎編、前掲書、102 ページ、402 ページ。

65 注 26 に同じ。

66 注 26 に同じ。

67 寺嶋宗一郎編、前掲書、前掲 27) 402 ページ

68 注 26 に同じ。

69 ここでの委員会は枚方市教育委員会を指す。枚方市「平成 17 年第 2 回枚方市議会定例会議案書」枚方市、2005 年 6 月、309-315 ページ。

70 注 45 に同じ。

71 枚方市文化財研究調査会「枚方市文化財年報 25(2003 年度分)」枚方市文化財研究調査会、2004 年、57 ページ。

72 枚方文化観光協会ホームページ

(<http://kagiya.kanko.hirakata.osaka.jp/>)

73 「広報 ひらかた」No. 1104、2006 年、6 ページ。

74 注 45 に同じ。

75 注 45 に同じ。

76 佐々木雅幸「5 都市文化の再生と創造都市」『岩波講座都市の再生を考える 8 グローバル時代の都市』岩波書店 2005 年、160 ページ。

77 同上、142 ページ。

(市民大学院文化政策・まちづくり大学校)